「幸せの鐘を鳴らそうよ」

大沼えり子（作家、NPO 法人ロージーベル理事長）

「一人の少年のあの笑顔を取り戻すために、私は保護司になりました。」

あれは長男がまだ小学１年生の時でした。

私は嫁ぎ先の割烹料理店の切り盛りに慌ただしい毎日を送っていましたが、鍵っ子だった自分と同じ寂しさを我が子には味合わせたくないと思い、午後には一時帰宅し、おやつを作って迎えていました。

せっかく作るのならと息子の友達にも振る舞うようになり、いつしか我が家は大勢の子供達の賑やかな遊び場となりました。

私は、彼らが心底愛おしく、うちに来る子はすべて自分の子のつもりで接していました。

その中に一人、他の子と遊ばず、いつも私のそばから離れない少年がいました。

母親が病のため愛情に飢えていたのでした。

母親の温もりを知って欲しいと思い、とりわけ彼には愛情を注いでいました。

そんなある日事件が起きました。

少年が、息子と一緒に遊びに行った友達の家から、マスコット人形を盗ったというのです。

友達の弟が大切にしていた人形だったため、母親まで巻き込んだ騒ぎになり、私の元に相談に見えたのです。

私は日頃から子供達に、うちの子になるならルールを守ろうねと言い聞かせていました。

嘘を付かない、人に迷惑をかけない等々、自分が親から言われてきたことばかりです。

「はい！」と元気に答える彼らの中でも、とりわけ嬉しそうに頷いていたのが、その少年でした。

それだけに、彼が人のものを盗ったとは信じられませんでした。

しかし、なくなった人形を少年の家で見たと息子が言うのです。

家庭の事情で玩具も満足に買ってもらえない少年。

盗ったのではなく、きっと欲しかったのだ。

私はそう考え、とにかく一緒に謝ろうと言いました。

ところが彼はいくら言い聞かせても謝ろうとしません。

裏切られた気持ちになった私は、「もう、うちには二度と来ないで！」と強い

口調で言ってしまいました。
　２ 週間くらいたった頃、布団を干していると、門のあたりに小さな人影がありました。チャイムを押そうとしてためらい、行ったり来たりしているのは、あの少年でした。
　彼がそうして毎日、うちに立ち寄っていることを息子から聞き、私は思わず駆け寄って抱きしめました。
　少年が「ごめんね。」と繰り返しながら漏らした言葉に、私は頭を打たれたようなショックを受けました。
　「あれは盗ったんじゃなくて、もらったんだ・・・」
　あの時、なぜもっと事情を聴いてあげられなかったのだろう。
　大好きな人から謝罪を強要され、幼い少年の心はどんなに傷ついたことだろう・・・。
　その後、少年は再び我が家に遊びに来るようになりましたが、家庭のことで心を荒ませ、いつしか顔を見せなくなりました。
　中学へ進学してからは、家の前を通るたびに、髪の色や服装が奇抜になっていき、声をかけても返事すらこなくなりました。
　そして、とうとう鑑別所に送られる身となったのです。
　もちろん直接の原因ではありませんが、あの時、無垢な彼の心を傷つけた後悔の念は、私の中に燻り続けていました。
　彼に償いがしたい。
　もう一度彼の笑顔に会いたい。
　ずっとそう思い続けていたので、保護司のお話をいただいた時は、二つ返事でお引き受けしたのです。
　その時からたくさんの少年達に出会ってきました。
　心が痛むのは、彼らのほとんどが、生まれてこの方腹から笑ったことがないという事実です。
　みんな幸せが欲しくて、欲しくて、懸命に手を伸ばしているのに、どこかで歯車が狂ってしまっている。
　彼らは、自分のことをカスとかゴミだと言いますが、私は彼らを無条件で好きになります。
　「君が大事なんだ。可愛くて、可愛くて仕方ないんだよ。」と言うと、涙をポロポロ流します。
　非行を犯して一時的に愉快になっても、それは真意ではなく、その後ずっと罪の意識でビクビクしながら過ごすことになる。
　人に感謝される行いを積み重ねてこそ、本当の幸せを手にできるといつも説いています。

あの少年が保護観察になると聞いたとき、私は監察官の方に頼んで彼を担当させてもらいました。
嫌がっていた彼は、私が彼のために保護司になったと告げると、驚きの表情を浮かべました。
「もう一度君の笑顔を見たいんだよ。一緒に幸せを探そう。」
彼は声を上げて泣きました。
今は寿司職人として独立を目指して頑張っています。
ようやく軍艦が握れるようになった頃、彼は私をお店に招待してくれました。
カウンター越しに彼の笑顔を見た瞬間、私は思わず胸が一杯になりました。
目頭を押さえながら食べた彼のお寿司は、世界一の味がしました。
関わった少年たちのことは、片時も頭から離れません。
観察期間が過ぎても慕ってくる彼らから、私は与えた以上の喜びを与えられ、抱き切れないくらいの心の財産をいただいております。
その後、家族がなかったり、家庭崩壊の中、帰る家もなく希望を失った少年を「お帰り。」と迎えてあげる家を作りたいと考え、私は立ち直り支援の「少年の家」「ロージーベル」を立ち上げました。
平成 23 年には NPO 法人に認定。
現在少年達が日々笑いの中、生活を共にしています。
人は誰でも心の中に幸せの鐘を持っています。
一人がその鐘を鳴らすと、周りの鐘も共鳴して幸せ色に変わっていくのです。
その鐘の音が共鳴し合い、周りをどんどん幸せ色に変えていけるよう、今日も私は少年達に、一緒に幸せの鐘を鳴らそうよ、と呼びかけ続けています。
そう、人は幸せになるために生まれてきたのですから。

【校長雑感】

平成 28 年度がスタートして早一ヶ月が過ぎました。
生徒達も、落ち着いた様子で、勉学に、そして部活動に励んでいるようです。
人は誰でも間違いを犯します。そこから立ち直るのには大変な苦しみが必要です。
そんな時に、温かい手を差し出してくれる人、自分のことを理解してくれる人がいるか否かで、その後の人生も大きく変わって来るでしょう。
親という字は、木の上に立って見ると書きます。
難しい年代の子供達ではありますが、大所高所にたって指導してまいります。
今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。